

義弟に嫌われていたはずなのに、婚約者登場でブチギレ豹変。
激重執着愛でどろどろに犯され、溺愛SEXで中出しまで堕ちる話
サンプル（一部抜粋）

「お姉ちゃん、大好き！」

小さな男の子が可愛い顔をして、私に抱きついてくる。

「私も大好きだよ。」

ぎゅっと抱きしめ返して、幸せを胸いっぱい広げる。

「…関わらないでくれる？」

男の子は私に抱きついたまま、急にそんな冷たい事を言う。

「え…？」

「嫌いだから。」

冷たい目をした男の子の顔が少しずつ崩れて、地面が崩れて奈落の底に落ちていく……

「っ！」

落ちる感覚でビクッとして目が覚めた。

「……はぁ……また同じ夢……」

昔からよくこの夢を見る。理由は…多分弟との関係で悩んでいるから。

私の家庭は少し特殊だ。

私が1歳の時に両親が離婚。理由は父親の不倫…って聞かされた。

物心がついた頃には親は母だけだったし、別にそれが普通だった。

だけど、小学校に上がる直前に

「名字が変わるのに、ちょうどいいタイミングだし。」

って言われて…新しい父親を紹介された。

新しい父親はどこかの会社の社長をしていて、1年前にシングルになったらしい。

結局、私はある日突然新しいお義父さんと3歳年下の義弟ができた感じだった。

まあ…お母さんが幸せそうだったし、お義父さんも優しそうだったし、義弟も可愛かったから全然良かったんだけど。

当時6歳の私と3歳の弟・遙人。

あの頃は…本当に幸せだった。一緒におままごとをしたり公園に遊びに行ったり…あつという間に遙人と仲良しになれて、『お姉ちゃん、大好き!』って沢山言ってくれて…可愛い弟が本当に…大好きだった。

(中略)

会話すらもなく、遥人は塾や部活で家に居る時間もどんどん少なくなつて：顔すらも見ない日が多くなつていく。

関係を改善することも出来ずに拒絶され続け：時間だけが過ぎていく。そんなある日「遥人、県外の大学に行くから一人暮らしするんだって。」と母から教えられた。

「一人暮らし：」

本人からは何も聞いていない。会話すらもないんだから、当然っちゃ当然だけど。

最後くらい：ちゃんと喋りたいな。

出発の前日、そう思つて遥人の部屋のドアをノックした。

「：遥人。ちょっといい？」

「……なに？」

冷たく低い感情のない声。ガチャツとゆっくりとドアを開けて、久しぶりに遥人の部屋に入る。

「明日、引っ越しだね：。」

「：うん。」

「：たまには：帰ってきてね！

ご飯とかおごるし：ほ、ほら、美味しいお店とか私いっぱい知ってるし！」

私の方を見る事もない遙人。悲しくて、会話が途切れないように必死で沢山の言葉を下手になぎ合わせて口から流していく。

「…はあ。」

だけど遙人は深くため息をついた。

「……？」

「要件はそれだけ？」

「え？」

「…くだらない内容で部屋に入ってくるなよ。」

「…な、なんでそんな言い方するの…？」

私はただ…昔みたいに仲良くしたいだけだよ…。」

「…昔…？……無理だな。」

「なんで…!？」

「なんでって…。嫌いだから。」

「きらい？」

「そう。姉ちゃんの事、嫌いだから。頼むから近寄らないで…」

こういうのが嫌だから、一人暮らしするんだから…。」

片手で頭を押さえ、私の姿すら視界に入れないようにしている…。

「…ごめん…ね。」

そんなに嫌われるような事を…私はしてしまったのかな。理由も何も分からないけれど、『嫌い』という言葉が悲しくて辛くて…声が震えて涙が出てしまいそうだった。

「…もう…出て行つて。」

「……うん。」

冷たい声に小さく頷いて…遙人の部屋を出た。

（中略）

……

その時からもう随分時間が経った。

私はすっかり大人になり、今はもう27歳だ。遙人とは…あれ以来顔を合わせていない。大型連休は実家に帰るけれど、私が実家に居る時は遙人は絶対に居ない。

空っぽになった遙人の部屋は、今はお義父さんの書斎になっている。

遙人はお母さん達曰く、お義父さんの会社で副社長として頑張っている…らしい。

私は遙人の連絡先すら知らない。でも今でも姉として…遙人を大切な弟だと思っている。

「濡！」

「あ、裕二くん。」

もう、私には大切な彼氏が居る。

まあ：今でもあんな夢を見るくらいには、遙人のことが心には残っているけれど。

「来週だよね？同棲前に挨拶に行くの。」

「うん。もうお母さん達には一応伝えてるよ！」

弟にもこの日は実家にくるように伝えてもらってるけど：居なかったらごめんね。」

「仲、悪いんだっけ？」

「：うん。」

「まあ：そのうち会えるだろうし、滯が気にすることないよ。」

そつと裕二くんに抱きしめられ、頬にちゅつと軽いキスをされる。優しい。幸せだなと：ただ思う。

来週の挨拶で、この全てが崩れることになるなんて：想像すらせずに。

（中略）

会話も何もないのに：ただ隣に座ってじつとテレビを見る遙人が分からない。

微妙な距離感：。隣からは妙に熱い空気を感じて、気まずい。

「：て、テレビのチャンネル変えよう：かなー：」

気まずくて、適当に一人でぶつぶつ喋りながらリモコンを手にする。

でもその瞬間、リモコンごと私の手をぎゅつと握られた。

「え…?」

大きな手…。いつの間にこんなに大きくなったんだろう…。私の手を簡単に覆い隠す遥人の綺麗な指…。

「り、リモコン…いる?」

妙に熱い掌に戸惑いながら、小さく…話しかける。

「…知らない」

「そ、そっか…。

手…離してもらってもいいかな…。」

「……」

遥人は目を閉じて何度も深呼吸をして…私は首を傾げる事しかなかった。

「遥人…?」

「……悪い」

遥人はゆっくりと手を離してくれた。けれど、離れる時、ぞわっと手の甲をなぞられた感覚がして…それがやたら身体に残る感覚で…なんだか今までと違う何かを…確かに感じ取っていた。

(中略)

「は…あ…ダメだよ…ねえ…遥人…っ…離して…」

彼の服を掴んだ手は…離せない。

「離したら逃げていくくせに。」

遙人はそう呟きながら、何度も何度も首に刻印を刻む。

「逃げない…から…っ、ねえ、お願い…。私達家族なんだよ…」

「嫌だ。」

懇願する私の言葉は、遙人のたった一言に拒絶され、消えていく。

遙人はそのまま私のパジャマの中に手を入れ、下着を着けていなかった胸を優しく優しく大きな掌で揉みしだく。

「あ…あ…っ…は…」

その優しい手つきがもどかしい。強引な事をしていくくせに、大切に…愛しているように私に触れる…。

(中略)

ちゅっとう優しいキス…。唇をなぞる舌。片手で身体を支えて私の頭を撫でながら、もう一方の手でクリトリスをゴリゴリとどんどん速度を上げて弄る。

「ん…ん…っ、ふ…ん…んっ」

叩き込まれる快感と、頭を優しく撫でる手…

「は…あああ…っ…遙人、それ、だめっ…っ…あああ」

「しーっ。声我慢してイって。」

キスで口を封じられる。私だって…声なんて出したくない。なのに…でちゃうんだもん…。

「んん…っ、んっ、んっ…！は…あ…んぐ…っっ！！」

身体が痙攣して縮こまる。クリトリスに電流が流れるように、ビリビリと気持ちよすぎる感覚が続く。

「…気持ちいい？」

クスクスと笑いながら私の髪を撫で、嬉しそうに微笑みかけてくる。

「気持ちよく…ない…っ」

身体が気持ちいいのは…分かっている。分かっているけど、それを認めたら…終わりな気がする。

「強情だな。いったくせに。」

余裕そうな遥人の表情…。

「…イってない…」

「嘘つき。」

「嘘じゃ…ない…」

意地を張って、遥人から目を逸らして嘘をつく。

「……」

遥人はクスクスと笑いながら、私の頬を撫で、耳にそっと唇を寄せる。

「…裕二くんにはイかせてもらえないのにね。」

「……それは……」

「俺にはイカされちゃうんだもんな。」

「……だから……イってないって……」

遥人は私が言っただけでほしくない言葉を、わざと選んで言っているような……気がする。

「なんだ。そっか。イってないんだ？」

「……うん……」

「じゃあ、ちゃんとイかせてあげないと、滯の身体が可哀想だな。」

遥人はにこやかにそう言っていると、私の頭から手を離し、ギシッと身体を起こした。

「え……？」

「ん？イってないんでしょ？」

「なら次はイかせてあげる。」

（溺愛えっちの全容は製品版にて）